◆九頭竜川流域委員会における論点整理（発言要旨集）第21回◆

発言状況等	内容区分			回答	分野	発言要旨	主意	ＩＤ
	質問	課題	提案					
第21回流域委員会			○		治水 （河川整備）	今後20年、30年の計画ですから、土地利用もいろいろ変わりますし、長い目で見て、今できるものはどれぐらいかなという考え方がいいんだと思います。できる、できないじゃなくて、今何かをするときには、できるだけのことを、環境を傷めないように20年のスパンでするということでいいんじゃないかと思うんです。	洪水調節やかんがい用水・環境用水の補給を補助的に行う多目的の池を整備する場合には、一気に整備するのではなく、将来の土地利用や環境に配慮しながら臨機応変に対応していくようにすればいい。	2101
第21回流域委員会	○		○	○	治水 （河川整備）	視察に行かれたとき、いいところばかりでなしに、やはり穴あきダムはこういう点が欠点だというところも中にはあっただろうと思う。また、遊水地という一つの問題も先ほどから話をされているんですけれども、そういうことであるならば、このダムに対する問題、または利水に対する問題でも、やはり農業関係者の方々の意見も聞いた上でする必要がある。	治水専用ダムの欠点は？　また、遊水地やダムについては、農業にも影響を与えるため農業関係者の意見を聞いた上で考えるべきではないか。	2102
第21回流域委員会			○		治水 （河川整備）	天神橋の300㎥/sカット、またはそれをオーバーしたときにゲートを締めるのであって、200㎥/s流れたときはそのまま流しておくということになってくると、または、そのときもそれなりのセーブをするということになってくると、それなりの振興策をするにしても、常時、1年に1回ずつぐらい雨が降るときがあるんだったら、ある程度高いところでなかったら、そういう施設をしても無意味なことになってしまう。	治水専用ダムは常時水が流れているということだが、振興事業としてダムサイトを利用するのであれば、できるだけ洪水の度に水が浸からないように整備をすべき。	2103
第21回流域委員会		○			治水 （河川整備）	洪水の時の水を、全部カットすると、そのダムがすぐパンクしてしまうから、水を流しつつ調節をしないといけない。流しつつ調節するという機能が洪水時に確保されることが大事であるため、流木を穴に余り近づけ過ぎないように、もし流れてきた場合には、もう少し上流で流木を止めるため、流木止めのような、スリットのようなもの、そういう構造的なものをあわせて考える必要があると思う。	治水専用ダムでは、洪水を流しつつ調節する機能を確保することが重要であるため、流木等に対する配慮が必要である。	2104
第21回流域委員会		○			環境・利水 （生物・景観）	竹田川の釜ヶ淵について、私は子供を連れて遊びに行くんですが、今は泳げない。それだけこの河川については、川底を歩いていても藻が発生している状態もありまして、それから水がやはり少なくなってきているという思いがあって、ダムができるということはプラスないしマイナスイメージが出てこざるを得ないということを思います。他方、それによってそれ以後、大きな水災害はなくなったということも事実ですから、功罪があるかと思います。	竹田川では、ダムが建設されたことにより洪水による被害は無くなったが、川の水の減少等の環境の変化が見られる。ダム建設にあたっては、環境への配慮が必要。	2105
第21回流域委員会			○		治水 （河川整備）	この委員会の役割は費用をいかに安くする委員会なのかなということについて、委員長の進め方について少し御指導いただきたいと思っている。行政の原点、政治の原点であります治山治水として、福井市民が安心してこの洪水対策に万全を期していただける中で、与えられた条件の中で精いっぱいいいものをつくっていただきたい。	治水対策の選定にあたっては、事業費を少なくすることを前提にするのではなく、与えられた制約条件の中から優れたものをつくっていくにはどうしたらいいのかを議論すべき。	2106
第21回流域委員会		○			治水 （河川整備）	一番最初に基本的なルールの話がここの委員会でなかった。それは何かというと、環境を最優先にするか、生命を最優先にするかいずれかの立場をとるかで。生命をそこそこ守りつつ、やはり環境が大事ですよという立場では、確実に安全というわけにいかない。	治水対策の基本的なルールとして、生命を最優先にするか、環境を最優先にするのか、それとも生命も環境も守るのかの選択が必要。	2107
第21回流域委員会			○		治水 （河川整備）	もし環境を大事にするのであれば、もちろん住民も大事にしなければいけない。その環境を大事にするために、場合によっては費用が倍かかってもやるべきということがあるのではないか。公共事業について湯水のように使ってはいけないが、長い目で見て本当に自然環境保全にもなり、住民のためになるということであれば、多少費用がかかっても、そういう面で費用で抑えて中途半端なものをつくるというのは、こういったことで後顧の憂いも残すことになるのではないか。	住民を大事にし環境も大事にするのであれば、治水対策は費用を抑えて中途半端なものとするより、多少費用がかかっても将来的に有益なものとするべき。	2108
第21回流域委員会			○		環境・利水 （生物・景観）	九頭竜川水系において、下流部分というのは一種の都市内河川という位置づけができ、人目に接する機会も非常に多い河川である。下流部分ではごみが目立つ。流れていない場所は、一種のごみ捨て場という感じになっており、流れている場所は、余りごみを捨てないようになっている。人目に接するところで、河川改修をする形であれば、見た目にきれいだとか、あるいは非常に安らぎがあるとか、言葉はそういうきれいな言葉になるかと思いますが、言いかえれば、ごみを捨てにくいような場所にもなるという風に思われる。都市内河川は美観、それから治水、こういった両者を融合させるような形のものをつくる。これに対してはお金がかかるかもしれませんが、先ほど言いましたような付加的な価値、また、人々がそういったところでいろいろ水に接するといったような付加的価値というものも、お金にかえがたいものがあるのではないかという気がいたしました。	下流部ブロックの都市内河川では、人目に接する機会が多いため、水質が悪く、ゴミも多いのが目につく。河川改修では、事業費のみならず、美観・治水を融合させることによってゴミを捨てない等の付加的な価値も考慮すべき。	2109
第21回流域委員会			○		地域と連携 （地域住民対応）	福井市民は川に対する意識が低かったのだろうと、そういう形で川をきれいにするという意識、コンセンサスを高めるためにお金もかかりますし、いろんな金がかかりますが、大事なところは、我々の意識の問題かなというところです。	福井市民の方に治水のことを知ってもらい、川に対する意識を高める必要がある。	2110
第21回流域委員会			○		流域委員会での検討スタンス	市民の皆さんにわかりやすくこうした問題を話すときに、学者先生の皆さんのお話は非常に理論的ですけれども、もう少し我々の生活レベル、目線でわかりやすく言っていただくとありがたい。生活レベルの目線で広報といいますか、皆さんに逆に論争を挑んでいただいてもいいと思いますし、進めていくのがいいんじゃないかなと思います。	市民にわかりやすく説明するためには、生活レベルの目線で話す必要がある。また、数字だけではイメージができないので、視覚的にわかりやすい広報を心がけて欲しい。	2111
第21回流域委員会	○			○	治水 （河川整備）	福井市内で問題になっているのは、市街化が進むことによって降雨強度が短時間に雨が降るような状況で河川の排水能力が追いつかないと状況で、大規模なものではないでしょうけれども、水がつくという現象が起きていると考えればいいのかということと、今実際にどういう形の河川改修をされているのかという部分を少し教えていただきたい。	福井市内では、市街化が進み、短時間で強い雨が降った場合に排水が追いつかない状況となっている。どのように対応・対策をしているのか?	2112
第21回流域委員会	○			○	環境・利水 （生物・景観）	どこの川も結構安全度が低いにしても、河川改修といえば掘削ということだけど、現況に比べたら整備後の断面が物すごく大きくなって等々があるんですが、土工量というのはどうなるんですか。20～30年かけたらどこかあいているところがあるとか、定規断面的に図しか見せてもらってないのですけれども、何か余りかわりがばえしないという印象ではあるんですが、整備後の河川の姿と全く同じようなものがどんどん増えていくような絵にしか想像できないが、治水ということからすれば、そこぐらいのものに断面としては要るのかもわかりません。物すごく余計に掘らなければいけないという図をたくさん見せてもらうものだから、ほかのブロックと似たり寄ったりという整備で、ブロックの地域性の特色はどういうところに出しておられるのかということを印象的に思った。	現況と比べると整備後の計画断面は大きいが、掘削で発生する残土処理等は考えているのか?また、整備計画はブロックの地域性を考慮したものとなっているのか?	2113
第21回流域委員会			○		環境・利水 （生物・景観）	一つ不安なのは、瀬や淵をつくるとか、草が生えているということが、環境に配慮したということと思っていることに問題があるのではないかと思います。そこの川が持っている、本来の河川の体質を科学的に解明し客観的な事実を明確にしないで、画一的にどこの川も同じになることに不安を持っています。	瀬・淵をつくることや、草が生えているということだけで環境に配慮していると考えるのではなく、その川独自の本来の姿を理解することが重要である。	2114
第21回流域委員会			○		環境・利水 （生物・景観）	もう少し臨機応変に、最低限これだけのことをするよ、というような目標をつくっていただいて、その目標を改修でどれくらいフォローできるかという方向へ説明していただければ、改修計画がわかりやすくなるんじゃないでしょか。川はすべての人の日本の財産ですから、財産の評価を科学的にしていきたいですね。	改修計画では、達成し得る最低限の環境目標を設定し、その目標達成に向けた取り組み方をわかりやすく説明していくことが重要。川は住民の共有財産であり、この財産の評価は科学的に行っていくべき。	2115
第21回流域委員会			○		地域と連携 （地域住民対応）	水の利用の仕方というのが、ある一つの場所で水を管理されているわけではなくて、いろいろな水を持っているところと、いかに横の連携をとって水の有効利用を図っていくかということで、水と緑のネットワーク整備の委員会で一つ苦労したところだというふうに思っています。この委員会の中では、例えば、いろんなモデルを選定していく中にも、本当に自分の前を流れている川のことについて、日ごろからきれいにするような活動をやっておられるようなところとも、より密接に関連して、そして改修をやっていくときには、どのような形でやっていけばいいのか、あるいはお互いが、管理側とその地域の方がどのように維持していくのかと、そういったようなことも今後考えていきましょう。いろんな見かけ上の形もそうですけれども、形にあらわれないソフト的な形での地域住民の方と、それから管理者側の維持管理というものが、特に都市の中にある河川においては重要なことじゃないのかということを委員会の中でも話し合ったかと思います。	水と緑のネットワーク整備を実現していくためには、水の管理や利用が一様ではないので、いかに地域との連携を図っていくかが重要である。また、日頃から維持管理に携わっている住民に対しては、整備計画の段階から協力をしてもらい、よりよい関係を築いていくべき。	2116